013838−000−1

特43−929

嚴島宮路の枝折

村田　良穂／編

M15

ABB−0047

特43
929

俗正 巖鳴雲治の枝折 全

村田良穂著

特43
929

序

尊きあたりよ參り面白き處よ到てゝ。親しき友を志のひ。歸たらんよゝ。とありし。かくありしなど。かたらむ事を。確しの人も必まづ思ふ事なり。されど山を越え。海をわたりて日數へぬをゞ。忘ぬる事ども少からずして。急よ思出んことかたき事よなんありける。我が嚴島は廻七里ばかりの島なをど。宮居の高大なるゝいふもさらよて。此處も彼處もみなゆゑよしある所々よしあれゞ。ひとたびふたさび參りたりとて。などかゝ委うすべき。然る故よ元祿十年小島常也嚴島道芝記七卷を撰むことをど當島の來由。祭式の次第。名所の故事等を纂しもれの櫓輿よゝありける。其後天保七年岡田清筆とりて。嚴島圖會十卷を編成す。此は給もまたさくみよもれしたをゞ。よの島よ渡らぬ人すら。よをを見ゞ。大宮の壯觀祭式の嚴重。寶物の形狀名所の緣由なども。委う志らるべきもれみしあれど。從者などをもつをす。ひとり杖をひきて參をる人々の。さる容易からぬものを負持たらむ事。旅籠よあまりていと重かるべきことなり。されば島内よむねとある條々を摘み。また圖會のなりたる後。神佛混淆引分の

事あり。去かして國幣中社になりたまひたをバ。祭式の改りたる地名のかはりたるなどをあらはし。彼の圖會ゑ洩たる事どもをも拾ひあはせて小冊となすべく。す〳〵むる人れあなるに。にはけなきをざながら。かくもれする事とゝ成けり。か〳〵をバ故事などの委からぬを咎むる事なかをきれはたゞ此神社ゑ參りたる人々の。三五日がほどゑ本社より始めて攝末社。さてゝ名た〳〵る所々をも廻らむ道の去るべともなり。且ゝ家ゑ歸て。とありしかくありしなど。人ゑかさらむは〳〵ろにぼゐの料ゑとてなむ

明治十一年五月廿日ばかり神園の立花

かをりくる朝座屋の窓下ゑ筆をとりて　琴秀舍主人去るす

凡例

一此編ゝ究て簡約を要す。さをど現今所在の攝末社ゝ小祠といへども一字も洩す事なし。然るゑ天保七年所編の嚴島圖會ゑ見ゐて此編ゑ載せざる神社往々あり。其ゝ明治五年改革の際最寄の神社へ合併ゑなりさるもれと去るべし

一寺院も現今所在のものゝ悉く擧ぐ。是又彼圖會ゑありて此編ゑなきもれ多し皆廢寺ゑ成たるなり又地藏堂等の深き來由なきゝ省けり

一名所古跡等も悉く洩す事なし。さをども殊なる趣もなく。指せる由緒もあらざるゝ總て省けり。まゑ故事ゝ畧言して其大槩を去らしむ。委くゝ彼圖會ゑ引合せて見べし

一古と今と景況の替りたると。地名の改りたる等ゝ其處々ゑ附ていふべし。總て現今の實景を著ていさ〳〵かも餘言する事なし

一神社佛刹名所古跡等錯列せるゝ。本社より始て攝末社等順拜の便りゑ因て去るしたるもれと去るべし

以上

嚴島社頭出全景

岩倉具選卿

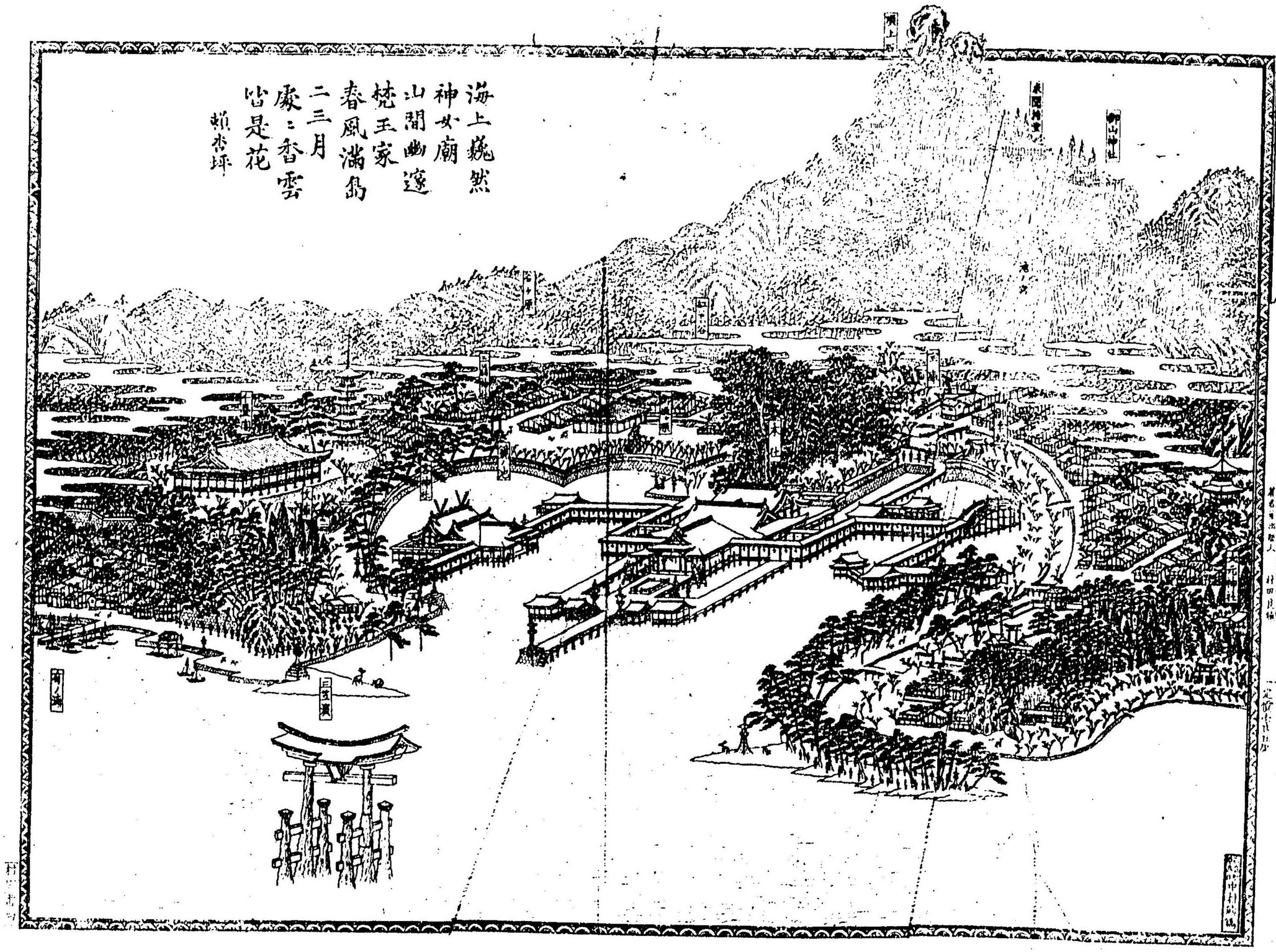
多知可幣理美耶吉

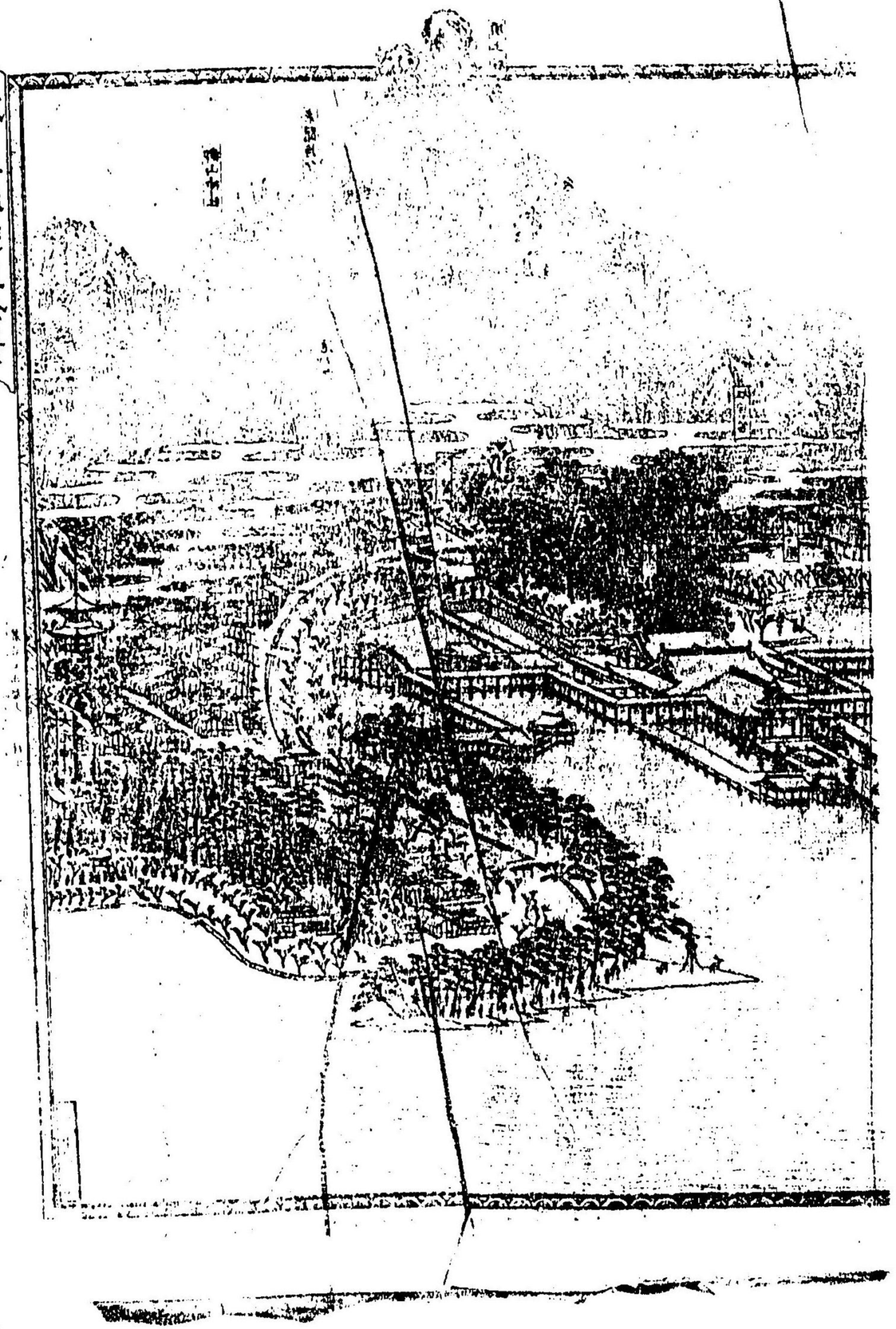
能飛登耳迦太羅武

裳許止波者通拟慈

伊都伎之末八滿

嚴島社頭山全景





嚴島宮路れ枝折

廣島縣安藝國　村田瓦穂編輯

嚴島ハ安藝國佐伯郡の海中ニ在て周廻七里。北の方廣島を去ること五里餘。西の方ハ同郡大野村最近くして一里ニ充ず。南ハはるかに周防伊豫の山々を見渡し。東ハ能美江田等の諸島ニ對し。山嶺巍々として松杉色深く人戸千軒本社のかさはらニ市をなせり。殊ニ當島ハ櫻樹數株わりて艶陽の花れ頃ハ。白雲長く連なりて山の腰ニ靉靆す本社ハ戌亥の方ニ向ひて三笠濱の下津石根ニ宮柱太敷立て。潮滿時ハ大宮の床下まで浪をたゝへて。遊べる魚も手ニ捕るばかりなり。抑當社本殿ニ鎮りまします三柱の姫大神ハ。掛卷もかしこき素戔嗚尊の御子ニおはしましけるが。天照大御神の神勅のまゝに。葦原の中津國ニ天降りましまして天孫の爲ニ祭をたまふ我が皇國の守護神たりの意を取る事以上神代紀抑て當社ニ御鎮座ましける事ハ人皇三十四代推古天皇の御代端正元年大歳癸丑一書ニ端正五年とあり。然ども大歳癸丑端正元年ハ号安藝國佐伯郡の住人佐伯鞍とあるニ依ゝバ元年なるべし○端正ハ年号ふんとあらず天皇即位の年をいひつゝ

不二人同郡恩賀島ニ魚を釣てありしに紅の帆を揚て西の職と所の翁名詳

方より來る船あり近づきて船中を覗へば舳前に嚴鋒に赤幣立たる嚴瓶を置て三柱の姫宮にはします。鞍職にむかひて宣まはく吾い古より此島を敢て幽事を治め百王を鎮護す汝朝廷に奏て此島に造宮すべしと示現あり。即鞍職都に上り神託の次第奏聞を遂げるに。折節都にてもまた神變ありけるによりて。奏す隨に社殿造營すべく勅命あり。鞍職畏りて當島に歸り。先づ大宮造るべき地を定んと新に船を造て舳前に五百津眞坂樹五百津野篤の八十玉串に珍の幣帛とりかけて。當島の浦々を廻巡るに靈鴉山上より飛來て舳前に進む乃ちまを導れ神として海濱を漕回行くに竟に三笠濱に止るかくて佐伯所れ二翁諸人をひきゐて三笠濱れ大石小石を打ならし遠山近山れ大峽小峽に立る樹を齋斧以て伐採り。高天原に千木高く新宮造建て其歳の十一月辛酉朔壬申常世れ神離と祝ひ定て鎮座る記れ意を取る以上當社鎮座まさ古傳に人皇十一代垂仁天皇れ御代大神此島に御鎮座ありて跡なりといふ。推古天皇れ御代佐伯鞍職に示現ありけるに御山神社其舊より大宮造立ありしもれなりといふ。かゝれば當島舊い思賀島といへりしを。大神鎮座ましましけるによりて神れ御名を島れ名におはせて市杵島

とも伊都伎島とも稱へまさ嚴島とも稱ふなるべし又宮島といへるも古くもれに見ゆたをぞも今い公の御文にすべて嚴島と稱へらをたり斯て創建の後度々朝廷より修理を加へさせらを祭式も重く行はせられける由いひ傳ふをぞも天文十五年當社神主源廣就佐伯郡櫻尾の城主たりし時大内義隆に亡さを舊記多く兵火にかゝりて失ひたをば往古朝廷より御寄附等れ證據となるべき文社藏ある事なし然をぞも延喜式神名帳に安藝國佐伯郡伊都岐島神社名神大とあり三代實錄に御贈位の事二度まで見ゆれば當時御祭式等のれろそかならざりし事れしてをるべしかくて平相國清盛安藝守たりし時より渇仰の思ふかくさらに神領を增加し社殿經營功を盡し攝末社に至るまで殘る處なく修理ありけをば世に比類稀なる壯觀とぞなをりける殊に承安四年後白河法皇御幸あらせられまさ治承四年高倉上皇御幸の節に金銀の幣捧げたまひて御崇敬淺からざりし御事なり其後鎌倉の將軍家續て足利氏まさ本國れ領守大内毛利福島淺野氏よりも時々祈願を籠られ神領寄附米許多ありて絶ず社殿に修理を加へ祭式怠る事なく行はれをり明治元年朝政一新の際改て勅願

所よ定めさせらを年々御撫物を治めたまひ同四年神佛混淆引分となりて別當供僧を廢止せられ尋て國幣中社よ定先させたまひ祭式等嚴重よ改りけるゝ誠よありがさき例よあそゝ有けれ

○參拜順路

○本社本殿　祭神　三座

市杵島姫命　田心姫命　湍津姫命

相殿　三座

國常立尊　天照皇大神　素戔嗚尊

○本殿　梁間六間三尺六寸　桁行十三間二尺二寸

○幣殿　梁三間一尺五寸　桁三間一尺八寸

○祓殿　梁六間四尺八寸　桁十三間三尺八寸

○平舞臺　平面百八十六坪

○火燒前　巾一間五尺三寸　長七間一尺三寸

○門客神社　二宇火燒前に左右よあり

祭神　櫛石窓命　豐石窓命

外ニ世三座

○大床　巾五尺

○拜殿　梁六間　桁七間四尺四寸

○髙舞臺　竪三間四尺　横三間

○樂房　左右各二宇　梁二間五寸　桁五間五寸

俗よ舌先といふ

○廻廊　巾二間二尺　長百四十八間三尺

本社の左右よ長く屈曲して一間毎よ鉄燈籠を釣たり　汐滿ときゝ數多の燈火波よ移りて光景たとへんよもれなし

社頭明燈　八景の一

影うつる月の光も消たれけり波のはてらす宮のともし火　芳樹

涙の上もみなともし火の花咲て春をとこよれとさの大宮　種守

夏神祇といへるよとを

すゝしさのいつくゝあれと嚴島神のまよまよ浦風そふく　清綱

はらへするきねゝ姿もいつくしま夕日を洗ふ波の涼しさ　清矩

七月十日ばかり嚴島の社頭よ侍ひて

浦松の風もれとせぬ夕なきよ去はみちくらし月そ深へる　尊福

社頭賞月

百八廻廊圓海宇大潮浸月夜過午此時安得起龍王

同見凌波素娥舞

社頭よ侍りゝる夜千鳥をきゝて　適處

燈火もまはらに更て大宮のとゝ殿ちかく千とりなくなり　幹之

○客神社　祭神　五座
天忍穂耳尊　天穂日命　天津彦根命　活津彦根命　熊野櫲日命
○本殿　梁　五間二尺三寸　桁　七間五尺五寸
○幣殿　梁　二間三尺五寸　桁　二間四尺七寸
○祓殿　梁　五間一尺四寸　桁　五間三尺五寸
○餓ヶ池　客神社の傍玉の御池に内よりあり汐退きて後平沙よ丸く窪みたる處ありて一小池をなせり秋夜月影よの池よすめる最あはれよ淸らかなり

鏡池秋月　八景に一

嚴しまいつくゝのあをとくもりなきかゝみの池の秋夜の月　正風

○朝座屋　梁　五間一尺五寸　桁　十一間八寸
○朝座の淸水　朝座屋の傍なる御池の内より常よ湧出て甚寒冽なり潮退きて後汲むことを得るなり又藥の水ともいふ
○神供所　朝座屋の内よ設く目今假よ本社拜殿の傍よ搆ふ

○社務所　同上
○揚氷橋　巾一間五尺　長三間
流したる卒都婆の寄り付さりしといへる石ありまさ康頼歸洛の後寄附の石燈籠一基建りかさち甚古雅なるもれなり

○大國神社　本社の左よあり
祭神　大國主命　相殿　保食神
○天神社　同上
祭神　菅原大神　又云天社天神
○長橋　巾一間四尺八寸　長十八間
○反橋　巾二間二尺　長十一間三尺
○能舞臺　能興行の時ゝ海面よ棧敷を設く
○行宮跡　能舞臺のわさりをいふ高倉上皇御幸の時此所よ御所を設けらをたりといひつさふ
○玉御池　大鳥居より内潮の到をる涯をいふ○大神鎭座の昔此處よ玉をうつみたりしよりてかく稱ふと云傳へり

○齋垣　總周百九十一間四尺　玉の御池の岸上ゟ建り
○繪馬　社頭の梁間ゟかゝげて大小すべて幾百枚なるゟをゝ
ゝらずされば玉石を撰まず人々よく稱呼するもれを
ひづかゟ擧ぐなは好事の人熟覽して筆意の淺深を味
ふべし○左ゟ記載する順次ハ筆蹟の甲乙ゟよらず東
廻廊より西廻廊ゟ至る是ハ兒ん人の便ゟ隨ひてなり

○鶴　東洋○張飛　古秀○秀鄕　素絢○三十六歌仙　書實隆公
書光信○神鴉　墨湖○狶鉾　丹倫○印譜　昇齋○孔雀　朱紫石
○龍　杏雨○鐘馗　藍江○吳工女　應震○陵王　梅華齋○虎
專定○白鹿　春水書○曹操　海僊○鯉　探幽○山水　抱一○
靜觀　高時書○松　光孚○韓信　觀山○蝦夷人物　武四郎○鷄
應舉○神馬　僊助畤繪○草摺引　俊峯○本社ノ詩　丈山自筆○
敦盛直實　丹甍○廐馬　畫工不詳○鷹　同上○宗高　丹倫○檀
風　藍江○孔明　直彦○波上日出　畫工不詳○羅生門　尙信○
松竹梅　眠山○繫馬　左近○三福神　常信○龍　伊川○寶船

畫工不詳○神光照海　實美公書○田植　永叔○龍　愛信○松間
日出　雅信○神馬　江阿彌○三十六歌仙　楊心○清正　元義○
鯉　雪塘○狂歌　貞佐○義家　有景○馬　畫工不詳○牛若辨慶
元信○草摺引木偶　作者不詳○仙人圍碁　岸良○三十六歌仙
書常雅公書左光芳右光惇○耶馬溪　皆雲○鷄　松林○漁樵　二
承○蝦蟇仙人　兆殿司○神功皇后　驪山○福海壽山　蒙處書○
日東第一勝　子琴錢○山姥　蘆雪○花紅葉　光孚○花瓶　逸峯
○神女　畫工不詳○神廟記　士式○菊慈童　藍江○道灌　芳園
○玄德　楠亭○大哉　協書○外國灣江　常春○虎　東洋○猿鹿
祖仙○太湖石　老山○神馬　荒雄○三十六歌仙　書龍山公書
工不詳○諧謔ノ發句　蒼虬撰○福祿壽　公長

○大鳥居　火燒前を距る事五十二丈八尺本社廣前の平沙ゟ建り
潮滿時ハ參詣の船帆を揚げながら鳥居をくゞりて入
來るものあり○古より改造數度なりしが今建るもれ
ハ明治七年十二月斧始ありて同八年七月棟上の式あ

りしものなり

○柱　高七間二尺五寸　圍五間三尺三寸

○棟　長十二間一尺七寸　上棟より軒先迄一間六寸

○左右距離　五間五尺八寸

○額　竪一間二尺三寸　横一間二尺

○副柱　高四間四尺三寸　圍三間五寸

○額庇　二間

○總高　八間三尺七寸

○有栖川二品熾仁親王御染筆○昔の額い表小野道風裏空海の筆なりと云傳ふれど存在せるものなし元龜元年改造の時大内義隆奏請ありし後奈良天皇宸筆の古額い今神庫ゑ藏す

明治八年七月大鳥居の更ゑ建けるときよみはべる

暑き日も神の御前のをさつみゑつはさ涼しく鳥居立なり　魯堂

涼しさやとりゐも去はゑ浮くはかり　一風

ゑれて足るあきのすらさや大とり居　蒼虬

○松原

右い玉の御池左い御手洗川の流ゑそひて長くさし出たり松の木間ゑ石燈籠あまさ立ならびて、是又社頭の光景を添ふ

○大願寺

興言宗なり明治四年改革の前い本社修理造營の事を掌どり庭内ゑ小松内府の植たまひしと云傳ふ老松ありしが今い枯て僅ゑ古跡を存せり○什物ゑ古鐘、屏風、豐太閤陣中の吸筒、其他畜幅等あり

○住吉神社

舊い大願寺の境内なりしが改革の際神地をとるつ

祭神　表筒男命　中筒男命　底筒男命

○石風呂

石を疊み土を塗て室を造り松を燒き潮とそゝぎて海藻を去き病者を入らしむ此風呂弘法大師の所造ゑして功驗甚多しといふ

○大元浦

平原海ゑ臨みて數株の櫻枝を接し花盛の頃い蒼々たる草の上ゑ紅の氈敷て遊宴の興かぎりなくはるゐに大野の山を望みて夕陽を惜まぬ者なし

大元櫻花　八景の一

大元の花のさかりゑ成ゑゝり神のをと先も袖やふるらむ　忠秋

ねなしくい櫻の限り去めはへて誘ふ嵐をよそゑふせゐむ　繁民

くろき羽を花よとり込むからすかな　梅通

○大元神社　大元浦よあり○一月廿日百手の式を行ふ

祭神　國常立尊　大山祇命　保食神　○相殿　佐伯鞍職

○橘山　此邊時鳥を聞くよ便よき處なり○因よ云當島よてハ

時鳥いとおはくれのゐさつきの頃とおもをバ山よても

鳴き浦よても名のり雖ゐハ待あゐしてつをなしと恨

る人のあるべき

なれもまさむゐし去のふゐ時鳥たちはな山の夕くれの聲　石子

いへいへよ聞してゆくやはと〳〵きす　鎮操

○經の尾　平清盛小石よ法華經を書て納らをし所なり

○空穗谷　秋夜草むらよすたく虫の音いとあはをなり

淺ちふや月よ玉しく露ふけてむしの音そよく夜半の秋風　頼玄

むし鳴くや去つかよひ〳〵く磯のなみ　快々

○神庶　本社の神馬を飼ふ處なり

○多賀岡　多賀堵ある故よかく名付く此邊も花見よよき處なり

○賀山神社

祭神　清正霊神

○愛染院　興言宗よて大聖院の末派なり

○瀧本坊　同上

○清盛旅館跡　久保町よあり

○留守口惠比須神社　中西町よあり

○祭神　佐伯鞍職

○金刀比羅神社　同上

○祭神、大物主命

○御手洗川　本社の後の流をいふ水源ハ紅葉谷の奥より出る

○筋違橋　御手洗川よとさせり

○賀庫　筋違橋の東よあり○賀物ハ卷末よあゞ

○花園　本社西廻廊の後をいふ櫻にはし

風塵易食是烟霞咫尺江山萬里賒獨與嚴洲綠不惡

五年兩度去觀花　虎山

ちをいまさ咲つく花のいつく島櫻の果いさくらなりけり　正勝

咲しより花を離をぬ胡蝶さへ夜いねぬるを我やなるなり　柳處

○御幸松　後白河法皇御幸の時此處よ松の木の御所と稱へし行宮のありしといひつたふ

○御垣ヶ原　本社の後なり舊い本地堂ありけるよりて觀音の原といへりしを明治四年改革の際本地堂を取除きて今の名よ改りたり此邊も櫻ねはし

○三翁神社　同所よあり○九月廿三日舞樂を奏そ

祭神　佐伯鞍職　所の翁　岩木翁

相殿　大巳貴命　猿田彦大神　平相國清盛公

○千疊閣　龜居山よ建り豐太閤九州へ發向の時本社よ參詣ありて大神の冥助を祈り翌年凱陣の折柄まさ船をよせて報賽ありし時此堂を造られしもれあり○此處臨觀最宜し

○豐國神社　千疊閣の内よあり

祭神　豐太閤

○五層塔　應永十四年七月建立といへりされど願主詳あらず

○荒胡子神社　龜居山の麓よあり

祭神　素戔嗚尊

○文庫　同所よあり本社の書籍を藏す

○湯立殿　同所よあり

○三笠濱　本社の邊すべて三笠の濱なれどもとき て廻廊の北口より龜居山のふもとの海邊をいふ○此處左い本社の殿宇建連り右い遠く海向ひの山々を望みて雪の景色甚淸し

三笠濱暮雪　八景の一

誰もみな家路とすれてさてそ見る三笠の濱の雪の夕くれ　美靜

月のうけ花の光もれよは、しとみかされ濱よふをるさら雪　少年龜太郎

世よ絶しよそひやゆきのいつくしま　梅宝

○有ノ浦　諸國の船當島よ來るもれい大槻此浦よ湊ふされバ參

客の送迎諸荷物の運輸等常に賑はしき處なり

有浦客船　八景の一

漕とむる船もあまさに有の浦のうら安けなる波の上かな　季知

ぬきあとれありの浦輪の友舟や花紅葉にもつとふ成らむ　春齢

○蛭子神社　有の浦にあり

○祭神　事代主命

○尼ノ洲　寛永四年堀の浦にて入水ありし二位尼の尸此處に漂ひつきたりし所なりといひ傳ふ

○氷天宮　濱の町にあり舊い神泉寺境内にありしが明治四年改革の際此處に移す

祭神　大綿津見神　安德天皇　二位尼

○存光寺　禪宗なり

○今伊勢神社　伊勢町の山上にあり

祭神　天照皇大神

○宮ノ尾　毛利元就陶全姜と合戰の時陣屋を設けらるし處なり

故に要害の鼻ともいふ

○小浦　船子どもたれはく住居する處なりいにしへいとびたる家のみなりしが今い樓など造りたるさへありて竈の烟もいと賑はへり

去はたをて色なき海人の袖をしも長閑にかへそ春の浦風　忠

○蛭子神社　小浦にあり

祭神　事代主命

○西行返　西行法師此處に來て島の女に道を問たりしにとみに應へもせざりしかば空蟬のもぬけのからにはくと問へば山路をさへもをしへさりゝりと詠たりしに女はゝ名みてもぬけのからかとこそよむべけを既にからに。と定めたまひさを答ふるよしなしといへりければ西行詞なくて此所より空しく歸りしと云傳ふ

○長濱　一名八重濱ともいふ此濱も櫻にはく眺望いと面白きところなり

客の送迎諸荷物の運輸等常ゑ賑はしき處なり

有浦客船　八景の一

漕とむる船もあまさゑ有の浦のうら安けなる波の上かな　季知

ぬきゑとけありの浦輪の友舟や花紅葉ゑもつとふ成らむ　春齢

○蛭子神社　有の浦ゑあり

○祭神　事代主命

○尼ノ洲　春永四年壇の浦ゑて入水ありし二位尼の尸此處ゑ漂ひつきたりし所なりといひ傳ふ

○氷天宮　濱の町ゑあり舊い神泉寺境内ゑありしが明治四年改革の際此處ゑ移す

祭神　大綿津見神　安德天皇　二位尼

○存光寺　禪宗なり

○今伊勢神社　伊勢町の山上ゑあり

祭神　天照皇大神

○宮ノ尾　毛利元就陶全姜と合戰の時陣屋を設けらをし處なり

故ゑ要害の鼻ともいふ

○小浦　船子どもたゆく住居する處なりいゑしへいをびたる家のみなりしが今い樓など造りたるさへありて竈の烟もいと賑はへり

去はたをて色なき海人の袖をしも長閑ゑかへそ春の浦風　忠

○蛭子神社　小浦ゑあり

祭神　事代主命

○西行返　西行法師此處ゑ來て島の女ゑ道を問たりしにとみゑ應へもせざりしかバ空蟬のもぬけのからゑはと問へバ山路をさへもをしへさりゝりと詠たりしゑ女はゝゑみてもぬけのからかとこそよむべけを既ゑからゑ。と定めたまひさをバ答ふるゑよしなしといへりけれバ西行詞なくて此所より空しく歸りしと云傳ふ

○長濱　一名八重濱ともいふ此邊も櫻にはく眺望いと面白きところなり

村雨のはをしなきさよ露ちりてさゝ涙かをる花のゆふ風　蒲園

まさ此濱よ海水浴場の設けあり○本島い總て海濱よ細砂をきさて波動の強弱よく度よ適ひ殊よ島内遊歩の地も亦多く實よ適應の場處ありといへり因よ云、鳥居ノ前、大元浦、網ノ浦、等よても浴を人あり、何をも潮瀬の緩急を量りて己が病よ適度の地を撰むもけあり

碧海廻山樹色新四時風景獨絶倫遊人此地眞多事　世外

七處胡神七里濱

○長濱神社　長はまよあり

祭神　興津彦神　興津姫神　○相殿　所ノ翁

○二王門跡　長濱より本町よ越ゆる道なり此邊も櫻多し

○新町　いよしへい最賑はへる遊廓よて全盛の太夫もあまさ在しがいつの頃よりか營業の音淋しく打掛の錦うちさびて踏ならす高足駄の音いさしかけ傘の柄と共よ長く絶果たり實よきのふの淵いけふの瀬と替る流の身の定めなきよ此處もまさ遊女の故郷となりさり

○德壽菴　存光寺の隱室なり堂内よ金石の地藏菩薩を安置す

○瀧の尾　山上よさゝやかなる瀧あり此處舊釋迦の大像を安置せる堂ありし故よ大佛の原といへりしを近年改て今の名よなりたり○此邊も櫻おはき故よ櫻が茶屋などいへる樓あり春よ雪の眺望も甚よしとす

梅柳いろもよはひもわかなくよいまさくら花の大君　元延

とりをさへ遥ふえあよ此あらしろあ　似水

雪の降々る日丸木橋よわそびて

白雪い神垣ならぬあさりまてゆふかけてこそ降積りけれ　隆正

はねさ木のゆきや雪ちるゆきのうへ　巨桃

○梅林　梅い近年植たるものなをども地味相應なしたるよや年々よ繁茂し花の頃い山風遠く薫りて衆人の袖よ餘るされば文客かならずたづねべき處なり

さきぬとてまつ鶯よ告やらむつかひさねなる梅のあさ風　清

かし島のかをりよむせふ麓すなり梅の山路の春の夕くれ　榎蔭

眼よあさる木いみなうめれ月夜かな　鉦史

○福壽坊　眞言宗あり近來大佛を安置せ

○北之神社　舊い北之藥師といへりしが改革の際神社よ改れり

祭神　猿田彦大神

○寶壽院　眞言宗なり本尊阿彌陀如來い往古當島網ノ浦の海中より顯をて靈驗多しといへりまよ堂内よ豐太閤の納たまひし藥師如來を安置す

○鳥居松　岡の上よ松二樹並び立るさまの鳥居よ似たるよ依て名づく此邊も櫻れはく眺望よき處なれバ霞たなびく春の頃い遊客宴を開きていと賑はしきところなり

ときは木よ眼をやすめけり花さかり　風郎

○本町　北ノ町中ノ町幸町等の名ありて商家軒を連ねたり中よも名物の色揚枝杓子木盆等をひさぐ店數多あり

○幸神社　幸町よあり○此邊を金鳥居ともいへり足利氏銅の鳥居を建んとして其功を竣ざりし處なりといひ傳ふ

祭神　猿田彦大神

○塔の岡　本町より本社よ參る要路よして五層塔ある鹿居山よつゞけるが故よ此名あり

○學校　本島内の小童をべて此門よ入る

○光明院　淨土宗なり天文の頃住職以八上人い不凡の大德なりしと傳稱す

○谷ヶ原　茫々たる平原楓谷の山上よつゞけり麋鹿常よ群をなして淺芽色つく秋のころ妻とふ聲のわはれなるい風流士のはらゞさよ去むなるべし

谷ヶ原麋鹿　八景の一

やつかはらむつれて遊ふ鹿見をいともよ樂む神の御園か　千廣

因よ云鹿の名所を谷ヶ原とも定めさるい然ること

なのらまた神垣よ眠りあるひい市中よ遊びて旅客よ馴るゝなど皆憎からぬさまなり抑鹿い大神の遣と稱

して往古よりはを獵る事を禁じ代々領主の保護厳
なく若誤て害する者あをバ即罪ゑ行はる故ゑその歎
年々繁殖すつらつら考ふるゑ鹿い神代ゑ太麻迦の占
業ゑ用ゐらをまさ迦久神といへるも鹿のおとなりと
いへる説ありて幽冥ゑおたしく仕奉る獸なり瑞應圖
ゑ云鹿者純善之獸ナリ王孝則白鹿見ハルとも見ゑて
角あれども常ゑ怒をる色なく其性の狡猾ならざるを
神も愛したまふなるべし

○神力寺

眞言宗なり○舊此地ゑ寶泉院といへる寺ありしが廢
寺となりける故當寺を瀧の尾より移したるなり

○秋葉神社

南町ゑあり

祭神　火産靈神

○紅葉谷

溪水清くして巖石奇なりかけ渡す橋のさま最趣深く
兩岸ゑ櫻の大木ありて花の頃い蕊をる白雲樓の軒ゑ
たなびくあるひい時鳥を聞き暑を避るゑたよりよく

紅葉い元より谷の名ゑおひて見るかぎり染つくし又
雪の日い玉子酒の樂み自在ゑて雅となく俗となく四
時ゑ客のたゆる事なし

紅葉谷ゑ落花を見て

氷かよふ櫻かもとの岩間より潛りかねたる花のうさかさ　蛙水

たく志をぬ花のなかるゝかけひかな　大必

川中の棧敷ゑすゝみゆる日

川涯のれとをまくらのうさゝねゑ秋を渡せる夢のうき橋　琴秀

秋日遊楓谷

丹楓蔭水々奔流臨水家々起小樓想得絃歌人散後　然白

數聲鹿鳴滿山秋

谷の紅葉染つくしたりとき〳〵て

日をへない鹿の蹄ゑ曜るへしとく行て見ん谷のもみち葉　菊舍

巖蕊亭ゑて

れとさむき夕山れろし吹もきてまとゑ落くる小男鹿の聲　萬壽

○四之宮　紅葉谷よりあり○此邊秋夜虫聲いとかなし

祭神　不詳

鳴く虫も夜ころの月よ面なをて影そむ方よ聲ぞきるらむ　樵月

○瀧町　筋違橋を渡りて御山よ登る道なり○以下御山神社へ參詣の順次よ考るす

○大聖院　眞言宗なり當院ハ代々本社の別當職よて座主と稱したりしが明治四年改革の際社役をはなる創立は大同元年なれども天文の禍ひよ舊記を失ひたをバ委しき事ハ考るよしなし然をども治承の御幸よ當院の住職を阿著梨よなされまさ天正年中よ仁助法親王御止住の事見ゆたりさをバ昔時寺格の輕からざりし事思ひやるべし新禱堂よ豐太閤の守本尊たりし等身不動明王を安置す○什物の内聖德太子の像ハ巨勢金岡の畫きたるよ後京極攝政眞經公の讃ありて珍らしき者也此外弘法大師の眞筆等あれども畧すまさ豐太閤當院の書院よて和歌の會を催したまひたりし時の歌三十六首を一軸よして是又秘藏せり

五月ばかり大聖院よやどりて

山かけや行水くらき川の瀬よ岩きりとはし飛はさるかな　貞勝

消もせて庭のかしハの葉かくれよ螢いきつく雨のゆふ暮　正綱

○多聞坊　眞言宗よて彌山本願と稱せし寺なり

○西方院　興言宗なり○當院の庭ハ雪舟の造りたるものなりと

いひつさふ

○一の鳥居　御山登路の麓よあり

○所不動堂　本尊不動明王ハ豐太閤の護身佛なりといふ

○瀧宮　一の鳥居より一丁余

祭神　湍津姫命

○白糸瀧　瀧宮の山上より落て水勢甚はげしく實よ白糸を亂せるが如くいかなる旱よも渇るゝ事なしまさ此邊螢ハく瀧のさら玉よ散みだるゝしきいとすゞし

瀧宮水鑑　八景の一

雲井より落くる瀧の宮のへゝ星となかれて飛はさるかな　忠敏

○御幸石　治承四年高倉上皇あの石上より白糸瀧叡覽ありしといふ

○中の堂　一の鳥居より七丁余此處迄登路甚嶮岨なるが故ゝ參詣の人れはく此堂ゝ憩ふ○名物ちから餅をひさぐ

○幕岩　數百丈の巖壁さながら幕を張りたるが如し

○力石　里諺に云福島左衛門太夫正則登山の時此石の邊ゝて怪異の事ありしゝより直ゝ下山ありけるゝし故ゝ太夫戻の石ともいふなり

○二の鳥居　一の鳥居より十五丁

○二王門　古ゝ未剋より後此門を限りて登山を禁さゝりしが明治四年改革ありてより此禁なし

○水晶石　表は常の石ゝ異ならぎ中央の穴より覗へゞ數丈の石中悉く水晶なりといふ

○御山神社　一の鳥居より十八丁

祭神　市杵島姫命　田心姫命　湍津姫命

當社ゝ大神當島へ御鎮座のはじ光影向ありし御蹟なるが故ゝ三柱の姫神を鎮めまつりしゝいつの頃ゝりか三鬼神を合せまつりて大神の御名ゝ稱ふる者もなく隱をたまひたりしを明治四年舊ゝ復して斯く祭る事とゝ成たりまた大神鎮座の山なれゞ御山と稱へしを佛家の徒山勢の不凡なるを須彌山ゝ比して彌山と改称しがきをも舊ゝ復せらきたり

○神鴉　形細くして凡鴉ゝ異なり始祖ゝ大神當島ゝ御鎮座の時去たがひ來るる由社傳あり毎年雌雄一雙を産し陰暦九月廿八日同郡海向ひ大野村大頭神社ゝ於て四鳥の別をなし親鳥の行方を去らぎ然るゝ慶應二年大野村戰場となりて一年別鴉の式を怠りしより爾來雌雄二雙と成りしれど二雙の外ゝ更ゝ增殖せる事無し

御山神鴉　八景の一

世と共ゑ朝て神ゑ仕ふるをあさからすとや見そなはす覽　重遠

○求聞持堂　本尊虛空藏菩薩ハ弘法大師の作なり此堂ハ大師求聞持修法滿座の靈場ゑして修法の行者千有餘年の今日ゑ至るまで一座も絶る事なしされバ圓爐ゑ焚く火ハ大師開持より傳はをりといふ○堂内ゑ大師の手蹟其外什物あり

○閼伽井　大師修法の加持水ゑして甚清洌なり

○曼陀羅石　磐面ゑ梵字ま（ま）た異字を鐫（きり）たり大師の作なりといふ

○時雨櫻　花ゑげくして露深し山風ゑあひ散かゝる露さながら玄ぐれゑ似たり

○玉取岩　石面ゑ玉を取りたりといへる痕あり

○鐘撞堂　治承元年右大將平宗盛寄附の洪鐘を鈎たり

○毗沙門堂　堂中ゑ武林士式の寫彌山佳景と題せる額あり士式ハ孟子の裔ゑて義士唯七の祖父なり

○頂上石　當山の絶頂ゑあり

○龍燈杉　數百歳を經たる老杉なり近年大かた枯行きて殆ゑれたるま〳〵僅ゑ枝葉の青きを存せり○此處は龍燈を臨視するゑ便よけをバ龍燈の上る夜ハ遠近の男女これ杉のもとゑ群集を故ゑかく名付たり龍燈とハ當來正月元日同六日の夜等當島浦々の海面より現ハるゑ火をいふ火色常の燈火ゑ異ならず山上より臨めバ點火の如しといへども間近く見れバ尺餘の一團火波を照して海底より浮び出る形勢甚すさまじといへり

初月沈山夜氣凝老杉風外坐巖稜茫々海面昏如墨
現出神龍幾點燈　彙宅

明治六年一月一日夜龍燈のあがりけると聞きて

波の上ゑけふさ〳〵くるわせさつみの都も年やたつの燈火　千枝

○船石　形船ゑ似たり

○大日堂　大同元年弘法大師の建立なり○堂内ゑ木造の燈籠あ

り甚古代なるもけなり

○奥ノ院　大師堂彌勒堂等あり

○龍ケ馬場　巖上より馬蹄の跡あるが故より駒ケ林といふといへり或云馬蹄の跡といへるハ弘中隆包毛利元就と戰ひし時陣とりたる幕串の跡なりまさ駒ケ林ハ駒返しの誤りなりともいへり

○三劍ノ窟　往古劍を収めし處なりといふ

○龍ケ窟　むかし龍の出しといへる巖穴あり深さ量るべからず

○護摩谷　盤石覆ひかゝりてれのづから一室をなせり弘法大師護摩修法ありし處なるより内より大師の像を安置す

○まをより二王門より出で元の道より歸るまさ谷歸つたひ蹈（たゞ）鞴（ふく）潟より出る道もあり

○巡島式　此式ハ大神鉞座のはじ先大宮處を定んとて佐伯鞍職所の翁等神鴉の先導より去さがひて浦々を巡りたまひし例よならひて七浦の神社より拜し鳥啄（とくを）の式を行ふなり其式ハ願主吉辰を撰みて島廻りの事を社務所より依頼し神官の承諾を聞き本日未明より各祓祓して船より乘る此時神官の船より四手切かけ榊おし立亂聲を奏して先より進む續て願主の船も山を右よおして漕出す明ぼの〳〵けしき身より去ミて蓬萊巖の鼻を出るべ東の方波路えるけき山の端よりよ(ゆ)ひ出る朝日影の海原より輝ぐおどれろろある言葉ハ盡しがさしかくて七浦の神社を巡り本社より歸りて神樂を奏そを例とそ○以下島巡りの順次より去るそ

○聖崎　當島北の鼻なり是より東を島の裏とす

○蓬萊巖　形畜がける蓬萊山といふものより似さり

ゆふしはやより〳〵はうらいのはなの浪　若翁

○海氣　清明の後殊より長閑なる日蓬萊巖の沖なる海上へ一面の金氣發して中より宮殿樓閣樹木等のかさちあらはれ暫くありてかつかつ消散し所謂蜃氣樓のたぐひよし

ていまだ其理を究めたるをきかず土人いはをを蕊といへり○古説よい此邊の海底そべて金砂なるが故よ其氣の發するもれなりといひ近來い海草の氣の蒸發そるよ社頭の景色の反射せるもれなりともいふ

○杉ノ浦神社　島巡第一の拜所なり

祭神　底津少童命

島めぐりの時此浦よ船を寄せて神社よ參り神官祝詞竟りて笛を奏し願主はじ先各拜をはりて朝餉の式ありはなはだ古風を存す　以下七浦の拜式いづれも同之

○金岡水　杉ノ浦の奥二丁よあり○此邊平洲よ金砂にはく交をりさる故よや水寒洌よして且甘味あり

山かけよ千代の契もむすはなん清水をなつれ命よいして　央

○包ノ浦神社　七浦の外なり島巡の時船より拜す

祭神　鹽土翁

○鷹巣浦神社　島巡第二の拜處なり○此浦よ鷹の爪貝といへるあり

祭神　底筒男命

○腰少浦神社　島巡第三の拜所なり

祭神　中津少童命

○蝶崎　比目魚よ似さる石あり故よ名づく

○青海苔浦神社島巡第四の拜所なり○島巡の時午飯の式あり

祭神　中筒男命

○陶全姜敗死跡　青海苔浦の奥十丁余高安ヶ原といへる地あり全姜い大内義隆の臣あり主家を亡して勢ひ近國よおよばんとせしを毛利元就のためよ滅せらる

○鍵父崎神社　七浦の外なり

祭神　鷲鶏

此處い濱もなく洲もなし故よ島巡の時船中より拜すかくて神官海中よ粢を浮べ樂を奏すれば鷲鶏忽ち山上より翔來りて波よ浮べる粢を啄へて御山よはこぶ是を鳥啄式といふ○此式を行ふ事願主の望よよる事

なれば定まれる日なし故よ久しく行はざる時あり又一日よ五組十組かさねてあをを行ふといへども鹽鴉の行ひかはる事なく万一あやまちて船中よ穢あれば鹽鴉染を運ぶことなしといふ

輕波一棹賽春祠七浦風光逐次移笛裏神鴉飛欲下　　愧齋

舟人搖櫓自遲々

○山白濱神社　島巡第五の拜所なり

祭神　表津少彦命

○革籠崎　當島南の鼻なり是より西を島の表とす○此地よ早咲の櫻一樹ありて雨水の頃より蕾を破る

唐ようろもはるまさ寒き浦かせよはころひ初る花の志さ紐　爲子

○須屋浦神社　島巡第六の拜所なり○島巡の時餡餅の饗あり

祭神　表筒男命

○磯の清水　磯際よありて潮退きたる後一小池をなし涌出る水甚清洌なる故よ往來の舟人ふをを汲で須屋の清水と賞

翫す

○御床浦神社　島巡第七の拜所なり○神前よ大なる巖ありて龜甲の文をなせり

祭神　市杵島姫命

○内待石　大江の浦よあり治承年中德大寺實定卿本社よ參詣ありて歸洛の節島人有子内侍あがぬ別を惜み此浦まで送り來りて悲歎の涙よくきし處なり○かくて後内侍此島をあくがを出て津の國住吉の沖よて身を沈め果はて敢なくなりたりとぞ

○鞴蹈鞴　平宗盛寄附の鐘を鑄さしめらをたる處なるよりて名づく○春の頃貝拾ひよ便りよけをば少女どもの打むをて遊びあへる處なり

○網の浦　此邊も櫻れはし○大元浦へ越んとする處を或人花の洞といへりしが實よ其名空しからをといふべし

○寶物　寶庫よ納まをり拜見せんと望む人い社務所よ求がふ

るべし

○高倉天皇之御扇　壹本
○安徳天皇之御靴具　六品
御衣　石帶　笏　飾釵　箙　檜扇　何をもいとちいさし
○宸翰　貳拾五枚
○親王御染筆　貳枚
○菲手畫檜扇　壹本
○假面　九面
抜頭　還城樂　陵王　納曾利　散手　貴徳　採桑老
二ノ舞　同壓面　以上承安の頃朝廷より御寄附のもれなり
中よも抜頭の面ハ享和二年天覽よ備へし時古物殊勝の品よ思召を大切よ致すべく旨叡翰を賜ふ　壹振
○奚貴　假面同時の御寄附なりと言傳ふ　壹挺
○鼓

同上　五管
○笙　第一小櫻第二春風第三小男鹿第四國家九第五獅子と稱し中よも小櫻ハ高倉天皇御愛翫の器なりしを治承四年御幸の時御奉納ありしもれなり　壹管
○笛　小さくらの笙を見はべりて　三管
亂をさる世々をさくらの名も去るく昔の儘よ匂ふ笛の音　有年
○篳篥　第一ハ駐腦よて造り第二ハ銅第三ハ異なるもれよあらず中よも駐腦の笛ハ豐太閤征韓の時彼國より奉りしを毛利家よ賜ひ同家より本社よ寄附ありし者なり　壹管
○高麗笛　二張
○和琴　壹張
○箏

法華と銘あり○律板柱とも添ふ　壹張

○琴　表裏とも蒔紋あり○平重衡愛翫の器ゑて唐の雷家の作なりと傳稱す　五面

○琵琶　第一谷川第二瀧涙第三磯涙第四落月第五無銘なり中ゑも第一谷川い玄上を擬して作をりし者なりと傳稱し最勝勝なるもれなりまさ第五い九條道房公愛翫の器なりと傳稱す

○太鼓　五挺

○鋲鼓　三挺

○二ノ鼓　壹挺

○三ノ鼓　壹挺

○鑾鈴判木　壹枚

○小忌衣　壹領

○法華經　高倉天皇宸筆　八卷

○壽量品　同　上　壹卷

○壽命經　同　上　壹卷

○經　卷　壹函

法華經二十八卷無量義經觀普賢經阿彌陀經心經願文各一卷都て卅三卷平相國清盛公の寄附ゑして願文い公の自筆ゑて餘い一族三十二人各壹卷を分ちて書寫ありしもれなり其裝飾の結構盡善盡美實ゑ當時平家の隆盛見るゑ足をり

後の世をあはをとへとや武士のたけき心もそ先紙ゑして　義一

○法華經　八卷　一卷闕

○理趣經　平清盛同頼盛の兩筆なり

○般若心經　弘法大師筆　壹卷

○細字法華經　同　上　壹卷

同　上　八卷

外函竪三寸横二寸深壹寸七歩字形の小さき事れしてあるべし

○華嚴經　筆者不知　五拾五卷

反古の裏ゑ寫して殊勝なるもけなり○反古經とも云

○袈裟　弘法大師隨身品　壹肩

○鈴杵盞盤　同上　壹具

○五鈷三鈷獨鈷　同上　各壹揖

○赤栴檀佛像　吡首羯摩作　壹軀

○古文書　貳百十八卷

神領　制令　祭祀　醫藥　寄進　雜物　等各部分なしさり

○榮花物語　松木内大臣宗條公筆　全部

○奉納和歌　藤原經尹卿筆　壹卷

○和漢朗詠集　冷泉爲成卿筆　壹卷

○本島八景詩歌　諸名家筆　三卷

○百人一首　外山光和卿筆　壹冊

○香記　壹卷

○掛物　廿六幅　巨勢金岡東福寺兆殿司狩野探幽等の筆あり

○硯　貳面

○墨　壹挺

○文盞　硯箱共　壹脚

○太刀　五十四口

螺鈿　兵庫鏁　嚴物作　裝束帶　錦包藤卷　衛府　新髭切

綱切　稻光　倉左近　等と銘せるものありて作ゝ　信國

天國　友成　貞秀　一文字　久國　助次助家兩作　國俊國

行兩作　菊一文字　兼光　等を以て稱譽す　三口

○劍　四十七口

○刀　亂れ　ヒ銘せるもけあり作ゝ　正廣　則國　西連　左文字

保昌五郎　地藏信國　助國　等を以て稱譽そ

○短刀　冊三口

天國　神息　友成　波平　行平　國光　正宗　國行　國俊

志津三郎兼氏　國光　兼光　村正　定廣　等の作あり

○薙刀　五振

貞宗　宗貞　等の作あり

○鎗　八本

信國　金道　等の作あり

上ゑ挙げたるい人々のよく稱讃するもれを拔出さる

ゑて此外ゑも名作數多あをべなは悉く熟覽して燒刃

匂等の眞味を知るべし

○弓　九張

○矢　十五筋

○甲冑　十三副

源義家同義光平重盛大内義隆等の着用ありしもれ各

一副また小櫻縅一副あり殊ゑ古の名作なりと傳稱す

又近來淺野家より寄附ありし物い兜面鎧胴鎧膝鎧籠

手脇當大袖等いづをも名作ある中ゑ兜い宗磨の作ゑ

て世ゑ比類なき由折紙ゑ見ゑたり

○古鏡　二面

○曲玉　十二顆

○七寶杯　壹箇

○青磁塔　壹基

○蘭奢待香　壹包

○赤栴檀　壹包

○沉ノ枕　壹本　長五尺三寸余

○沈枕　壹箇

○青磁枕　壹箇

○黄楊駒　壹頭　春日作と傳稱す

○銀獅子　壹頭

○木馬　壹頭　辨慶の翫物と傳稱す

○故器　壺具
○古銅印　二顆
○古錢　三百八十九枚

豎太閤社參の時納めたまひし賽錢なり

○年中定祭日幷行事式

官祭

○月並祭　一月一日二月以下同之御簾捲垂神饌進撤祝詞奏上神官拜禮等の次第ハ祈年祭の條ニ委くミるすべし

○日供　祭日の外日々獻ず

○元始祭　同月三日

○孝明天皇祭　同月卅日○御垣の原ニ遙拜所を設く

○祈年祭　月日不定○二月四日式部寮ニ於て班幣あり地方廳へ到着の上吉日を卜して祭日を定む其式ハ地方長官以下祭ニ關る官員及び神官共ニ前日より齋戒を當日早旦神官神殿を裝飾し午前第八時神官地方官一同幄舍ニ着く次ニ御幣物を幄舍の前ニ入置く次ニ宮司社殿ニ昇りて御簾を捲き畢て側ニ侍し此間奏樂次ニ稱宜以下神饌を傳供し此間も奏樂次ニ屬御幣物を辛櫃ニり出し假ニ案上ニ置く次ニ宮司御幣物を神前の案上ニ奉り座ニ着て祝詞を奏し次ニ地方長官玉串を奉り拜禮畢て幄舍ニ復す次ニ屬以下拜禮次ニ宮司玉串を奉り拜禮次ニ稱宜以下拜禮次ニ御幣物及神饌を撤す此間奏樂次ニ宮司御簾を垂る畢て下殿神官一同幄舍ニ復し此間も奏樂次ニ退出し○神饌八臺　和稻荒稻酒二瓶　海魚　川魚　海菜　野菜　菓　鹽　水　以上

○紀元節

○神武天皇祭　二月十一日○遙拜所同上

○例祭　四月三日　○同上　六月十七日○祭式祈年祭ニ同くして地方次官同屬等參拜あり

○大祓　同月三十日
○神嘗祭　九月十七日○遙拜所同上
○新嘗祭　十一月廿三日○祭式所年祭ゑ同じ
○大祓　十二月卅一日
○除夜祭　同月同日

私祭

○神衣祭　一月一日○午前第一時神官一同幅舍ゑ着き稱宜神衣を内陣ゑ奉る○神衣ハ白絞ゑ龜甲の紋を織出しさるもれなり前年機殿ゑ注繩引廻し服工謹してまきを調し社頭ゑ収む神官まれを裁縫て本日此式あり
○新年祭　同月同日○舞樂あり振鉾
因ゑ云當島ゑ家居せる者ハ毎朝小桶を持て神前の潮を汲締り屋内を清むる事一日もれまさる事なし殊ゑ一月一日ハ未明より戸々きはひ出て神前ゑ至り潮を汲み家をそゝぎ身を潔めて本社ゑ參詣もるを例とす

是を若潮迎へといふ

明治九年一月一日廣前ゑはべりて

さと人のくむや御前の若潮ゑはのはれ去らむ去年の月影　真穂

○同二ノ祭　同月二日○舞樂ゑ万歳樂延喜樂あり
○同三ノ祭　同月三日○舞樂ゑ太平樂掐鉾胡德樂陵王納曾利あり
本日の太平樂ハ治承年中左大將德大寺實定卿本社の廣前ゑて奏たまひしを例として世々神官野坂家ゑて勤先來をり○因ゑ云當社の舞樂ハ最上古より傳はりていまゑしへの盛なりしことハ神庫ゑ収まきる樂器を見ても去るべしまさ拔頭蘇香還城樂等の秘曲もみな舊神官の家々ゑ傳ハりて今ゑ存せり○舞樂奉納せんと願ふ人あをゞ臨時ゑも行ふ事あり
○楊枝獻上祭　同月四日○楊枝ハ當島産物の第一なり故ゑ獻ず
○斧始式　同月同日
○地久祭　同月五日○舞樂ゑ振鉾甘州林霞拔頭還城樂あり○本

日ハ未明より行ひて朝日影御山の嶺よりはひ出て舞人の面を照すを例とせり故ゑ日の出祭ともいふ

○月並舞樂遥拜　同月十五日（二月以下准之）

○月並祭　同月十七日（二月以下准之）

○月並和歌會　同月廿五日（二月以下准之）天神社の拜殿ゑて行ひ兼題の短冊を神前ゑ掲ぐ

○歌會講中安全祭　三月十七日○講中の輩ハ幣殿ゑて拜禮を許す

○同　靈神祭　同月同日

○推古天皇　四月十八日○舞樂ゑ萬歳樂延喜樂陵王納曾利あり

○桃花祭　以桃花盛定日○舊ハ三月十五日を定日とせり○舞樂ゑ振鉾一曲曾利古桃李花（舞ナシ）萬歳樂延喜樂散手貴德陵王納曾利あり○此祭式ハ海華よりはじまりて音樂中桃花を本殿ゑ獻ず

○歌會島巡　五月十五日

○管絃祭　陰暦六月十七日相當日○此祭式ハ御船三艘を組で屋形を造り神輿を乘せ奉りて神官左右ゑ列そ水主ハ素袍袴ゑて烏帽子を冠り各棹を取るまゝ引船三艘蜈蚣の如く艦をれし並べて先ゑ立ち大鳥居の前より直ゑ地御前神社海向ひの廣前ゑ渡り神事ありて管絃を奏一里余それより本島ゑ歸り長濱神社大元神社等の前ゑて も管絃ありて御船を大鳥居より本社火燒崎ゑ漕入を祭式最嚴重あり次ゑ客神社の御前ゑ至り管絃等前の如しかくて御船を升形玉の御池の内ゑ入を三回めぐらして本殿ゑ還幸あし奉るを例とせり○此祭式を拜んと諸國より集ひ來る船舳艫相接て海原を狹しとす此夜各船の帆柱屋形等まゝ戸々の屋上ゑ掲げて獻る御燈幾數万なるゑとを知らぎさちぬだゑ月明らけき夜燈火の影廣き海面を照し管絃の音心耳を澄して雖かハ渴仰の思淺かるべき實ゑ海西の大祭壯觀まゝ類ひな

かるべし○此祭式ハ薄暮汐のさし來る頃より始めて子剋ばかり汐の退く頃終るを舊來の式とす故ゑなは陰暦六月十七日相當日を以て行ふなり昔ハ神官供僧左右ゑ列座して神官管絃を奏じ供僧伽陀を修したりしが明治四年改めて上文の如くなりたり

地似蓬壺開別宴危檣層閣一潯々鳳凰調倦管月娥舞龍負神舟
天女還廊底潮聲人踏海街頭燈焰市燒山豈知游客繁華夢在
此林猴野鹿間　霜山

因ゑ云此祭式ゑ御船の供奉として廣島の町々より御供船と稱し猩々緋ゑ金銀の糸もて種々の繪を縫たる幕を走らし幟吹貫を押立今樣の音曲を囃しつゝ祭禮の前夜廣島の川口を出て本日の祭式ゑ闕り翌日廣島ゑ歸る遠近の男女ゑをも見んとて群集なす事ゑさたびたゝし

○敬會講社安全祭　九月十七日○講中の拜禮式三月ゑ同じ

○同　盈神祭　同月同日

○菊花祭　以菊花盛定日○舞樂ゑ振鉾一曲曾利古賀殿舞ナ萬歳樂延喜樂散手貴德陵王納曾利等あり○式ハ桃花祭ゑれなじく音樂中菊花を本殿ゑ獻ず

○敬會巡島　十月十五日

○天長節祭　十一月三日○舞樂ゑ萬歳樂延喜樂陵王納曾利等あり

○神衣裁縫　十二月廿六日より廿九日ゑ至る

○御煤拂式　同月卅一日

○鎮火祭　同月同日○午後第六時松明の式あり

○産物　當島ゑ産じて人のよく賞譽するもけを擧ぐ

○色楊枝　かさち種々ゑ削りなして五色ゑ染ひけさる最美しきもけなり。

○杓子　大小種々ありいゑしへ島人清心といへる者削り初たる故ゑ清心杓子といひて用ゐるゑ甚便りよし

○木匙　近來い形種々ゑ削なしていとたくみなるあり

○木盆　摸樣種々彫刻せり中ゑも神圖　の舊材まゑ御幸松の古木等を以て造る者あり好事の人愛翫そべし

○蘭　御山の深谷ゑ生ぜ石蘭柔蘭片葉蘭鶯蘭岩千鳥蘭孔雀蘭等の數種あり文客盆栽ゑして愛すべきもれなり

片葉蘭といへるゑとを物名ゑよ先る

文机のかさはらゑ置てゑれも又風雅の友の一くさゑせむ　道直

○岩茸　御山千仭の谷なる巖壁ゑ生ぜ採る者甚危しといふ

○茅茹　御山ゑ産するもれ治産ゑ功驗ありといふ

○松露　須屋浦ゑ生ずるものをよしとす

○海松貝　雷島の近海ゑ産す甘味ありていやしからず

○目張魚　革籠崎の邊ゑて釣たるもれ味ひ殊ゑ美なり

○櫻海苔　御床浦邊より出る雅人の賞すべきもれなり

○總太郎漬　糠を水ゑ浸して魚肉貝肉等を漬たり好事の人雅味なりとて賞せり

○雪花漬　豆腐の殼より魚肉貝肉菌等を漬て風味はなはだ愛すべきものなり

○裏櫻餅　御垣の原より闇ぐ上戸の去らざる味ひまゝ愛すべし

都まて風の便りよかをり來てそれ名ゆかしきうら櫻かな　三屋子

○木鹿　島人小川瓦平字米齋といへる老人の彫刻したるそれ能く眞を得たりとて世より賞せらる明治十年內國博覽場へ出して花紋賞牌を拜授せり

嚴島宮路の枝折了

明治十一年六月十三日出版　御届濟
同　年七月十日　刻成
明治十五年七月廿七日修正再版　御届濟
同　年七月　刻成

定價拾五錢

編輯兼出版人　廣島縣士族　村田良穂
廣島縣安芸國佐伯郡嚴島百四十五番邸寄留

發兌所　廣島大手町一丁目　松村善介

正誤　十六丁ウ三行露ハ靈ナリ　二十丁ウ一行るゝ字除クヘシ